

---

# みんなちがって、みんないい？

Genta

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みんなちがつて、みんないい？

### 【著者名】

N4681B

### 【作者名】

Genta

### 【あらすじ】

ある朝小谷は、息子が読んでいた絵本の一文に惹かれる。その絵本の一文から、小谷の過去の記憶が引き出されるのだが……。

(前書き)

この作品は、私の実体験をベースに書きました。

「パパ！起きてよ」

俺の胸に骨ばった重みがのしかかる。

「うぐつ…苦しいよ」

そう言いながら、俺は目を開けた。

誠太は「ごつごつした手足をばたつかせて、俺の腹の上で暴れいる。

「誠太……何時だ？」

「もう10時だよ！」

そう感じながら、彼はなおも俺の胸にパンチを叩きこむ。6歳ともなればそこそこ腕力もある。無防備に寝たままで堪えるのは、ちょっと厳しい。

「ちよつちよつとタンマ…わっ…分かつた分かつた！起きるから……」

誠太は今朝観た戦隊ヒーロー物の特撮の「」遊びにて、どうしても俺を誘い込みたいらしい。

い。

「ぐおおおつ…こうなれば……巨大化しておまえと戦うしかなこつだなあ！」

起き上がりざまに掛け布団」と誠太をすつ飛ばしてやる。ベッド

から落とされた彼は

「俺もスーパー口ボに合体だあ！」

なんて言っている。

強制的に叩き起された俺だったけれど、せほどの不快感はなかった。ここどころ仕事

上のあれこれに忙殺された日々をおくつていたから、熟睡と言つても良いくらいにぐっす

り眠つて、息子と戯れながら田代覚めると叫うのは、決して悪いこと

ではなによつに思える。

毎日毎日ベッドから自分の体を引き剥がすよつにして、出勤していきたここの数日を思えば、

久しぶりの休日である今口は、俺に幸せを満喫させるに十分だと思えた。

ブラインドの紐を引っ張ると、細く開いた羽の隙間から日差しが室内を満たす。

「そう言えば誠太とももう長こと遊んでいない、飯を食つたら公園でキヤツチボールでもしてやるか！」

そう思いながらリビングに向かつ。

テーブルの上には朝食がセットされていた。

「ママは？」

「もうとっくに出掛けちゃった。友達に会いに行くつて出掛けたよ  
そう言えば、「高校の頃の友達に会いに行くから留守番よひしく  
ね」って言われていたこ

とを思い出す。

「そつか。つじや、今日はパパと留守番しなきやなあ

誠太は朝食を済ませていた。

空になつた彼の皿やマグカップを食洗機に突つ込むついでに、鍋に入つているコーンスープを暖め直す。

「おれ……いぬ……、おまえ……にんげん……」

朝飯とも昼飯とも言えそうな食事をしている俺の隣で、誠太は絵本を読んでいる。読むと  
言つにはまだまだたどたどしい風だけれど、つつかえつつかえ文字  
を辿る様は微笑ましい。

「誠太さん、面白そうな絵本だね」

誠太は、ひらがなが読めるよつになつたことが嬉しいらしく、最近  
では目に付くひらがな

を片っ端から声に出しては読んでいる。例えば、寿司屋に行けば「パパ、「がり」って何?」とか、「「たこわさ」って書いてあるよ。これ何?」と叫んだ具合に……。

子供の好奇心は頗もしい、俺はそう思つ。子供の頃に芽生えた好奇心の萌芽は、やがて探求心へと繋がる。それを邪魔しないスタンスで、彼らの成長をサポートするのが、大人の親のあるべき態度のようと思つ。

俺は幼い頃からあれこれと考え事をする癖があった。水槽の中を泳ぎ回る金魚と、窓際に置かれたまま身じろぎもしない観葉植物、彼らに等しく『えられて』いる「命」と言つもの不思議に思えた。

「動いている動物と、動かない植物。泳いでる金魚の命は分かるけど、あの鉢植えの命つて?」

そんな風な小さな疑問は、やがて「命つて何なんだひつ?」、「生きている!つてひづつ」とだらり~、と言つ風な疑問へと形作られていった。同世

代の子供たちが「レンジャー」の類の遊びに夢中になつてゐる時に。水槽の金魚と鉢植えの観葉植物を見比べて、命について空想していたのだから、一風変わった子供であつたことは間違いない。

そんな俺のことを「普通の子供と違うから……」と言つて奇異な目で見るでもなく、何ら咎めるでもなく、両親は寛容に接してくれた。そんな両親の態度が

今の俺を作り上げる第一の要因と言える。

それに加えて、幼い頃から今に至るまで多くの親類や友人、知人の死を目の当たりにしたと言つ経験が、「命の意味」、「生きることの意味」を探求する心に拍車を掛けた。

「ことある」とこ、「命とは?」、「生きる意味とは?」……、そう言つた類の自問自答を繰り返してきた俺が、最終的に村上幸之助の倫理学研究室に身を置くことになったのは、偶然ではないような気もする。

テーブルの上の「一ヒーはすっかり冷めてしまっていた。  
誠太は退屈そうな表情で俺の顔を覗き込んでいる。

「パパ、何かして遊ぼうよ!」

「おっ、悪い悪い!」

俺が子供の頃の感傷に浸つていてる間に誠太は絵本を読み終えてしまっていたらしく、最後のページが開かれたままになつていてる。

「あれとおまえ、ぜんぜんちがう。だけど、すき。だから、ともだち」

犬の頭に手を置いている男の子の絵にそんな言葉が添えられている。

その一文にふと惹かれた。

「あれとおまえ、ぜんぜんちがう。だけど、すき。だから、ともだち」

この言葉に何故惹かれるのだろう。その答えを記憶の隅々から手繰り寄せるには少しの時間が必要に思えた。

誠太の好みそうなアニメのDVDを無造作にラックから掘み出す。  
これで暫くは過去の記憶と戯れる時間が稼げそうだ。

時々気まぐれに通っていたプールバーで、盛岡真喜子と出会ったのは、俺が大学生だつた頃だ。

「隣良いですか？」

彼女はそんな風に声を掛けてきた。

別に断る理由もなかつたから、俺は「どうぞ」と応じた。流れのボサノバ、球がぶつかり合つてポケットに入る音、それらが程良くミックスされて、

小気味良い和音を響かせている。店内の賑わいが小気味良さを醸し出せば醸し出すほどに、

何も言わずに隣に座る真喜子の物憂げな表情が際だつ。

まるで彼女の居る場所だけが周囲の賑わいからざつくりと切り取られたみたいだ。耳を澄

ませば、絵画の一部分を切り取る鋭利な刃物の音さえ聞こえてきそうな気がして、俺は彼女から目を反らした。

「裏切られるつて辛いことですよね？」

近くのテーブルでカードマジックをしているバーテンの手元を注視していた俺に、唐突にそんなせりふが聞こえた。

TVのドラマかアニメか何から抜き出してきたような空々しい響きの主は、隣に居る真喜子だった。

「私ね、親友に……、夫を奪われたの……」

初対面の……しかも……人生経験の欠片も手にしていないような若造に話す話題にしては常軌を逸する重たい話だ。「ドン引き」と言つ表現がぴったり来るような状況であった

にも関わらず、俺は彼女の側から離れることができなかつた。

「ぴぴぴぴっ！ぴぴぴぴっ！」、心の隅っこは「この状況は明らかにヤバイ！」と鋭く尖

つた警告音を発しているのに、その場から立ち去る」とも、彼女から田を「反らすことも、話題を変えることすらできなかつた。

「耳を貸してくれなきや、刺すわよ!」的な危険な光が真喜子の瞳に宿つていたからだ。

「危険な物や状況は避けねば良い」つてのはもつともらしい答えだし、万人がそれを選ぶ

だらうことは間違いないのだけれど、危険な物への好奇心とか危うい状況下に自分の身を

晒すことを、当時の俺は欲していたのかもしれない。危険な状況に晒されたって、俺なら

どうにか切り抜けられる!、何の根拠もなくそんな風な気持ちをもつていたと言い換えた方が的確だ

る。

「わつ私は夫のこと愛していたの。親友のことだつて、信頼してたの!本当に……」

時に泣きながら、時に怒りで頬を紅潮させながら、彼女はおよそ思い付くかぎりの恨み言を紡ぎつづける。

俺はあまりの現実感のなさに呆然としながら、いつ終わるとも知れない肉声の固まりを耳に流し込んでいた。

「勘弁してくれよつ!」

と思う反面、カウンセラーとか精神科医の疑似体験を楽しんでいるようなところもあつた。俺が学んでいれる倫理学が「人がより良く生きることを探求する学問」だとするなら、ここに

に居る、田の前に居る悲しみと愚痴や恨み言にまみれたこの女を、どうぞ引いた闇から引きずり出してやれるのではないか!、そんな風にさえ思つていた。

「若さ」と言ひ言葉を俺なりに説明して哲学めいた書物に載つける

ことができるのだとし

たら、「若さとは、勇気と無謀が脳中合わせで同居していく、自信と傲慢がごちゃ混ぜに

飽和してくる時代」と書くだろ？。

無論、無謀だとか傲慢とは無縁で、緩やかで柔らかな時間の流れに漂つている若さと言つ

時代があつてもかまわないけれど、少なくとも俺のあの頃を「若さ」と言う言葉でかたづ

けるには、無謀や傲慢と言つたエッセンスが必要だと思つ。

皮肉にも、俺の手元にあつた倫理学的理論武装は、真喜子の心を易々と攻撃できたし、そのことが俺の傲慢を成長させ、俺を良い気にさせた。

大皿が割れるけたたましい音が空気を震わせる。

「ひやつ！」

真喜子は驚いてびっくりとした。

音の方向に視線を移すと、客がちよつとした口論をしていながらしことが分かつた。酒の

上での諍いならちよくちよくあることだし、注目するほどの大乱闘にも発展しなかつたの

だけれど、大皿の割れる音を合図に俺と真喜子は、傲慢と恨み言が繰り返される異空間から引き戻された。

「ビリヤードやつたことがあります？」

俺の間に真喜子は首を横に動かした。

「やつてみますか？面白いっすよ！」

俺は真喜子に、手球をどのボールでも良いから当ててポケットに落とせばとにかく一点、と言つ風な初步的なゲームを教えた。

俺が盛岡真喜子の名前を知ったのはその時だった。それまでは一方的に彼女が俺に対して、

自分の身の上話をはき出してばかりいたものだから、俺が学生で倫理学に興味があること、

酒や煙草をやる悪友が居ることなんかを話したのもその時だ。

「つじやー！」

ひとりしきりゲームをやり済べた頃、俺はそのままして店をでようとした。

「もう帰るの？」

彼女は寂しげな視線を俺に向けた。「一人にしないでー！」、そう言われたような気がして、

俺は彼女の手を取ってしまった。

トーストの焼ける香ばしい香りがする。田を覚ますと隣に真喜子は居なかつた。キッチンと呼ぶにはあまりにも粗末で小さな流し台に立つていて彼女を背中で感じることができた。

ここが古びたラブホテルだつたら、田覚めた場所が湿つたシーツの上だつたなら、一夜の出来事だとか、ちょっとしたアクシデントだとか言って、真喜子との関係をこれつくりにできただろう。

それがどうだ？ここは古びたラブホテルなんかじゃない。田覚めた場所だつて、畳の上にしかれた布団の中だ。

そこは、夫と別れた真喜子が引っ越して來たばかりの古びたアパートだつた。

部屋の隅っこに積まれたままの、まだ開けられていない箱たち、皿の上のトーストと田玉焼き、何もかもが生々しい。

その生々しい空氣の中に何の矛盾もなさげに俺が溶け込む。その

様は、引っ越ししたての

ぎこちない新婚夫婦に似ていた。もしも、外側から俺たちを見る存在があつたとすれば、

間違いなく「新婚さんヒューヒュー！」なんてひやかしたに違いない。

出されたトーストと田玉焼きを頬張る。真喜子はそんな俺の向かい側で、幸せそうに微笑んでいる。

そんな状況に違和感を感じながらも、昨夜真喜子を抱いたことの重みをトーストたちと一緒に飲み下す俺が居た。

それから、俺と真喜子はずるずると同棲を始め、俺が大学を卒業するのを待たずに、彼女は俺と同じ姓を名乗るようになっていた。

「成り行き」と言う言葉が、自分の選んだ人生だとか、しでかしてしまった悪行なんかの免罪符になるのなら、そうすることが許されるのなら、真喜子と始めた飯事みたいな生活の中で、「成り行き」

つて言葉を俺は何回振り翳しただろう。

自身の傲慢を前面に押し出して成り行きで場当たり的に始めた生活に後ろめたさを感じていたから、

俺は、決して「成り行き」って言葉を使わなかつた。

「これは成り行きなんかじゃない！」、「成り行きに見えるかも知れないけど、これだつて愛の形だ

！」、自分にそう言い聞かせていた。

幼い頃から、俺が一風変わった思考をしようが、突拍子もない冒険をしてかそつが、寛容に受け止めてくれていた両親ですら、俺と真喜子の生活を祝福してはくれなかつた。

危うげな光をちらつかせる俺たちの生活を心配する友人も居た。「つまりは、おまえさんは一度寝ちまつたことを負い目に感じているわけだ……」なんて露骨に言つ奴も居た。

それらが感じられる度に、俺は心中で繰り返した。「これは成り行きなんかじやない!」、「成り行きに見えるかも知れないけど、これだつて愛の形だ!」、と。

俺が大学院に進んで暫くした頃、龍太が生まれた。7月4日が彼の誕生日だ。

龍太はちょっとした風邪をひいたりしたけれど、元気に育ってくれた。元気な彼と戯れることは、俺にとつて日だまりのように思えた。

日だまりの反対側に闇があるように、龍太が寝た後、俺と真喜子は言い争いを繰り返した。

真喜子は、ストレスがあると言つてはその解消手段として浪費を選び、不満があると言つては、悪態をついた。勿論彼女がそうするからには、それなりの理由だとか原因があつて、その中に俺と言つ

存在が大きな位置を占めていたことは否めないけれど、彼女がはき出す浪費や悪態の全てを受け入れられるほどに俺は大人ではなかつたし、広い心を持ち合わせてもいなかつた。

「どうせ私なんて生きてても仕方ない!死ぬ!」、彼女は感情が高ぶるとヒステリックに金切り声を上げて、キッチンから包丁を持ち出したことだつてあった。寂しさからかまつて欲しかつたのかも知れない、何かの辛さを表現したかつただけかも知れない、だけどその手段として「死ぬ!」って言葉

を使う真喜子が赦せなかつた。生きていたい…といへり望んでも終えなければならなかつた……、沢

山の命の光を見送つてきた俺には、どうにも我慢ならなかつた。

俺は真喜子に手を上げた。「手を上げた」なんてきれいなもんじやない！そう、ぶん殴つたつて言つた方がぴつたり来る。

昼間は研究だと、論文執筆を機械的にこなさなくてはならなかつたし、夜になれば真喜子との言い争いにエネルギーを放出しなければならなかつた。

そんな日々が積み重なるうちに、「あつ笑わなきやー…」って意識しなければ笑うこともできなくなつてしまつていた。

成り行きみたいな始まりで紡がれた生活の中にも、勿論愛しさはあつた。よちよち歩けるようにな

つた龍太の無邪氣さは愛しく思つた。真喜子との間にも楽しい記憶だつてあつた。だから藻搔いた。

俺は俺なりに、真喜子は真喜子なりに……。

そして、俺たちの生活は崩壊した。食前酒、オードブル、スープ、魚料理、肉料理、サラダ、チーズ、ケーキ、フルーツ、コーヒー……、フルコース料理に決まり切つた順序があるのと同じ風に、俺

は離婚と言つ何とも後味の悪い苦みを含んだデザートにありついた。「前菜の「出会い」でござります」、「本田のスープ」「成り行きの一晩」でござります」、「お魚料理」「情性の結婚」でござります」、「お肉料理」「おめでた」でござります」、「泥沼のもめ事」サラダでござります」、「本日のデザート「離婚」でござります」、次々と料理が運ばれて来る様を想

像して、俺は自分を嘲笑した。

どんなに努力したって、真喜子との間に幸せを紡ぐことはできなかつた。どんなに言い訳をしたつて、俺が子供を捨てた事実に変わりはない。俺は自分を責め苛んだ。俺の心の中は敗北感で満たされていた。真喜子と理解し合えなかつたこと、龍太との別れ、それらは皆、敗北感だつた。

「すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがつて、みんない」

金子みすずの「わたしと小鳥とすずと」に出会つたのは、ちょうどその頃だつた。偶然につけたカーラジオから聞こえてきたのだ。

一度聴いた詩をさらりと暗記できる能力は俺にはなかつたけれど、「わたしと小鳥とすずはみんな違つけれど、みんないいよね!」、そんな風なメッセージだけは俺の心に響いた。俺は思わず路肩に車を停めて、呆然としてしまつた。

「違いを認めて理解し合つ、理解し合つて互いの良さを見付け合つ、それは真喜子との生活の中で俺ができなかつたことだし、これからを生きる指針にできやうと思えた。

涙で霞むフロントガラスの向こう側につつあらじとした希望の光が見えるような気がして、俺はアクセルを踏み込んだ。

「おれとおまえ、ぜんぜんちがつ。だけど、すき。だから、ともだち」「犬と男の子も互いの違いを

認め合い、友達として暮らしている。

この一文に惹かれたのは、「すすと、小鳥と、それからわたしみんなちがって、みんないい」と同じメッセージを俺に伝えたからなのだろう。

誠太の観ているDVDはエンディングテーマにさしかかっている。食い入るように画面を凝視しているところを見ると、俺が過去の記憶と戯れていた時間を、誠太も誠太なりに塗り潰していたのだろうと思えた。

本棚の隅つこの金子みすずの詩集を取り、犬の絵本と見比べてみる。金子の詩集と出会つてから、俺は徐々に、着実に、幸せに近づけたよつの気がする。意識しなくとも、努力しなくとも、笑えるようになつた。傲慢さや無謀とも少しづつ距離を置くよつにもなつた。

そして、大学で事務をしていた山木加奈子と出会い、誠太が生ま  
れて6年経ち、「努力しなくたつて  
幸せはそつと寄り添つてくれる!」、「泥沼を藻搔かなくても感じ  
られる幸せこそが、本当の  
幸せなのだ!」、そう実感できるよつになつた。

「お腹空いたよ、パパ!」

DVDを見終えた誠太が俺をせかす。時計のデジタル表示は、誠太の空腹度合」と、俺が過去の感傷に浸つていたその深さを示しているようだった。

「よしつ！昼飯食べに行くか！」

寿司、パスタ、カレーライス、お好み焼き……、選択肢は沢山あつたのだけれど、結局俺たちはマクドナルドからハンバーガーをテイクアウトすることにした。

冬に不似合いなくらいのぽかぽかした日差しが降り注ぐ公園のベンチで、俺たちはちょっと遅めの昼飯を食べた。

「パパ、ハワイも冬なの？」

「そうだなあ、冬だけど……、とっても温かいんだ」

春になれば誠太も小学生だ。学校に行くようになる前に、誠太と2人で旅行に行こうと決めていた。行き先は妻と旅行したハワイが良い。そんな計画を誠太にも話してあつたから、彼もハワイに興味を持つたのだろう。

「ハワイは温かいの？」

「そうだよ、誠太。パパはねえ、……、ハワイの温かい公園でママと一緒にハンバーガー食べたんだよ」

そう言いながら俺は、妻との新婚旅行を思い出していた。

「じゃあ、こんどは誠太とパパでハワイの公園行くんだね？」

「そうだよ、公園にも動物園にも……、海にも行こう！海で水遊びしような！」

「海に？冬なのに？」

誠太は目をまん丸にしている。冬と水遊びが結びつかなくて、不可思議でならないようだ。

「ハワイの冬はねえ……」

そう言いかけた時、携帯が鳴った。いつでも何処でも連絡が取れるこの通信機器は本当に便利だ。

今では会話ができるだけでなく、メールだとか、ネットで調べ物までできてしまう。便利な反面、携

帯は俺たちを束縛する。何処に居ても、どんな状況だったとしても、それとは無関係の用件を突きつけてくるからだ。今もそうだ、息子との休日を楽しんでいる俺に、

何らかの用件を突きつけようとしてくるからだ。

ている。

俺は思々しいその通信機器に手を落とした。ディスプレーは相川武弘からの着信を知らせている。

「パパ電話電話！」

「ああ、分かつてるって……」

気乗りのしない相手だったから無視を決め込むつもりでいたのだけれど、誠太にせかされてのろのろと通話ボタンを押す。

「はい……」

「小谷、今何処だ？」

せっかちな声が受話口から流れて来る。

「ああ、息子と公園だよ」

「……無駄にどでかいモニメントのある公園か？ちょうど良かつた。今からそっちへ行く。そうだ

なあ、10分もあれば着けると思うが……」

そこで待つてろ！ と言わんばかりの俺様口調にうんざりする。

「何か話しあるのか？ 今言えよ

「とにかく会つてから話す。煙草1本分くらいの時間で済む。手間は取らせんよ。じゃあ……」

そう言い残すと受話口は、つーつーと溜息を漏らした。

相川武弘は大学の頃からの友達だ。学生の頃は倫理学だの哲学だのを肴に議論しながら徹夜で飲んだものだ。

村上幸之助の倫理学研究室に残ると言つ道を互いに選択したのだけれど、相川と俺とは相容れない考え方と言つか目的でそこに居た。

俺は純粹に倫理学を探求したかった。偽善者、ふるとか、格好の良いことを言いたくてそうしていたのではなく、幼い頃からの「命」だ

とか「生きることの意味」への好

奇心が冷めないまままでいたから、そうしただけだ。

相川はと言うと、「教授の椅子に座らんのなら大学に残る意味なんてない！」と誰憚ることなく言ってのけるような奴だ。この言葉だけ取り出してみても、彼はなかかの野心家だとえる。

互いに相容れない俺と相川だったが、犬猿の仲と言うのでもなかつた。俺は相川の頭の切れの良さを高く買つていたし、相川も俺が書いた論文を読んで「俺には真似できんよ！」と感嘆したことも度々あつた。

ただ、俺にしてみれば、自分の野心のためなら場合によつては他人を貶めることも辞さないと言つ風な相川の一側面もしつっていたから、程良く距離を取つてつき合つている、と言つたところだ。

「誠太、パパはこれからちょっと仕事の話があるから……、1人で遊んでくれるか？」

相川はどんな難解な話を持ち込んで来るかも知れない。複雑な大人の話は誠太には難音にすぎない。

大人になれば嫌でも難解な人生を歩む必要だってある。子供のうちは、純粹で無邪気なままで良いのだから……。

相川が来たのは、誠太を遊具のある方へ送り出して程ない頃だつた。

「よつ！」

そう言いながら、相川は缶コーヒーを投げてよこした。

「おっ、サンキュー」

「小谷先生に改めてお願ひがありましてねえ……」

「どうした?」と俺が尋ねるのを待たず、相川はそう切り出した。彼がこんな風な慇懃無礼な口調で話す時は、たいていがろくでもない話だ。

「おまえさんの好きな倫理学の研究素材のことだ」

「研究素材?」

相川は煙草に火をつけた。俺もそれに応じて胸ポケットをまさぐる。

「おまえさん、「現代人の自由主義と倫理観の変容」って研究してんだろう?俺の知人に、おまえさんの研究素材にぴったりの女が居てな……」

そう言われて、嫌な感じがした。俺は確かに「現代人の自由主義と倫理観の変容」って研究をしている。

る。時代が移り変わると同様に人の倫理観も変わっている。倫理学の古書をまさぐるだけでは現代

の倫理観を知り、吟味考察することなんてできない。

だから、現代人の実像を知る意味で、いろんな世代の人と会話するように心がけていた。

その場所は時に喫茶店だったり、時に研究室だったりしたけれど、俺はいつでも会話の相手を、俺の研究の協力者として見ていた。

そんな風に心掛けていたからこそ、相川が「研究素材

」「だとか、「女」なんて口にするのを聞いて不快な感じがしたのだ。

「パラサイトシングルと二ートのダブルコンボみたいな女でな……」  
言いながら相川は俺の隣に腰を下ろした

「パラサイトシングルとか二ートを直して欲しいってんなら、専門外だが……」

「直せ、なんて言わんよ。おまえさん風に言つと、「より良き人生への気付き」ってやつさ。おまえ

さんと話すことで、その女がだなあ……、生きがいみたいなやつに

辿りつけるんじゃないか？って思

つてな。おまえさんはおまえさんで、パラサイト・シングルと二ートの考

えてることを研究に生かせば

良いってわけだ。悪い話ではなかろう？

俺たちのすぐ側をサッカーボールが転がって行つた。男の子がそれを追う。

「おまえの知り合いなんだろ？……それならおまえがその女性にいろいろ話してやれば良いじゃないか？」

相川は、そもそもじれつたいと言つ風に、がしがしと頭を搔いた。  
「パラサイト・シングルと二ートなんぞ相手にしても、俺の手柄には

ならんよ」

そう言いながら相川は吸つていた煙草をぽいと投げ捨て、踵で踏み消した。踏みつけられた吸殻が、

「パラサイト・シングルや二ートは俺の野心には不要だ！」と言つた風な彼の心を表しているよう

思えた。

「とにかくだ、明日の午後……そudadなあ、3時に行かせるから、体空けといってくれ」

そう言い残すと、相川はベンチから立ち上がり、去つて行つた。  
俺の隣に置き去りにされた紅茶の空き缶だけが、相川が今までそこに居たことを示していた。

「すみません。遅れちゃつて……」

そう言いながら彼女が俺の研究室に入つて来たのは、約束の時刻3時を10分くらい過ぎた頃だった。

「お母さんと買い物してたら……ついつい長くなってしまつて……」

小柄で端正な顔立ち、誰が見ても標準より少し上に評価するくらいの美貌の持ち主の彼女は、俺にし

てみれば意外だった。オタクと言えば「オタク」、プロレスラーと言えば

マッチョ……、そんなステレオタ

イプのイメージと同じように、相川から、「パラサイトシングルと

二ートのダブルコンボみたいな女

だ」と聞かされた時から、勝手な像を思い描いていたからだらつ。

「まあとりあえず、おかげください」

俺は彼女に椅子を勧めた。彼女と向かい合った瞬間、「ぴぴぴぴ  
ぴ、ぴぴぴ」 と丸みを帯びた電

子音が心の隅っこで聞こえた。それは、ほんの微かな音だつたから、  
差ほど気にはならなかつた。隣

の部屋の時計のアラームか何かだらつと思えるほどに……。

「初めてまして、私は小谷です。倫理学を研究しています。貴方が日  
頃どんな風なお考えで生活してお

られるか……、まあ、そんなことをお話いただいて、現代の倫理観  
を研究する手がかりにしようと考えています。どうぞご協力ください」

俺はいつものようにそう言いながら、簡単なアンケート用紙を彼  
女に差し出す。用紙には、年齢、性  
別、職業のような基本情報を記入してもらつ欄と、「倫理学と言つ  
言葉から何を連想しますか?」 と  
か、「貴方は今自由だと思いますか?」 とか、「日本は良い国だと  
思いますか?」 ……のよつな調査

対象者の考え方を概観するための回答欄がある。

彼女は、俺が手渡した用紙にさりげなくとペンを走らせる。

「あつ、お名前の欄は記入いただかなくてもけつひつですよ。その  
他の項目も……、書きたくない欄  
はお書きいただかなくて良いですよ」

俺は微笑んで見せた。今から俺が彼女とじよつとしていることは、  
尋問や取調べではない。あくまで

も会話だ。だから答えたくないことを強制的に引き出す必要はなか

つた。

会話する中から、相手の考え方や心の中を知るためには、相手との円滑な関係が必要だ。相手に緊張を与えたり、不信感を持たせては、何も知ることはできないだろうし、こちらから何を伝えても相手の心には響かないだろう。

「さあ、分かりません」

俺は彼女にいくつかの質問を投げかけてみたけれど、たいていの答えはこんな風だった。

「簡単で良いですから、貴方の人生観みたいなものを聞かせてください」と聞こうが、「生きがい……、そうですねえ……、例えば趣味とか、田頃楽しみにしていることはありますか?」と聞こうが、

彼女の答えは、「さあ、分かりません」だった。

俺はしささか狼狽してしまった。「この人は何も考えずに、何も感じずに、日々を過ごしているのか?」「はたして、何も考えないことなんてできるんだろうか?」、全く理解ができないでいた。

倫理学とか、哲学とか、道徳とか、そんな小難しいことを考えられない、いや、意図的に考えないようにしていったとしてもだ、毎日を生きる中で、人は何らかの思考をしているはずだ。だとしたら、俺の目の前に居る女性は何なんだ?毎日が空虚で、ただただ時間が流れに任せて、人生を漂つてきたと言つのか?

「では、ちょっと質問を変えてみましようか。貴方の家族について、何かお話をいただけますか?」

「お父さんとお母さんとお姉ちゃんが居て……」

「やつですか、『J西親とお姉様ですか。……あつ、続けてください』

彼女の話を促す。それにしても、発言が未熟すぎる。俺なり「西親と姉が居ます」って答えるはずだ。小学生じゃあるまいし、「お父さん、お母さん、お姉ちゃん」ってのは、聞いているこちらが顔を赤くしてしまいそうだった。

初対面の相手との接し方に問題があること、これがパワサイトシングルや一ートの特質だとすれば

俺の中に偏見の種が一つ増えてしまいやつな気がした。

「冬になるとやっぱし寒いでしょ？だから……、お父さんもお母さんも私も、布団の中に居る時間がどうしても長くなっちゃうんです。お姉ちゃんはばいぶん前に家を出ちゃって……、結婚したり離婚したり……、馬鹿みたいでしょ？お父さんとお母さんの側はひとつも温かいのに……。外に出たつて温かさなんてビビにもないの……」

俺が家族のことには話題を向けると、彼女は目を輝かせて話続けた。さつきまで「さあ、分かりません」と言っていた人とは別人みたいなしゃべりっぷりだ。

「お父さんもお母さんもねえ、家とか買うのつてもつたいないって言つんです。私もお父さんやお母さんが言つんだつたら……そなのかなあつて……。都営住宅つじく安いんですよ。収入が増えち

やつと住めなくなるから、うちの家族はそこいら辺に領を付けてるんですよ。さつきいただいたアンケ

ーーにも書きましたけど、日本つて良い国だと語つたですよねえ。あくせく働かなくたつて生活保護制度もありますし、食べ物だつて毎日特売やってるじゃないですか。贅沢言わなければ、十分暮らしき

て行ける国ですよねえ！」

彼女の話すことは、どれもこれもが、俺が知る限りの、体験した限りの実社会とは隔絶されたものだつた。思いつくままに、しかも誇らしげに俺からすれば異常とも言える家族のことを話し続けている。

嬉嬉として話すその様は、真夜中にＴＶで流れている「ジャパネットたかた」の番組を想像させた。

「なんと！」このカーナビが1000000円を切った価格でご提供！です。分割金利手数料はジャパネットが負担します！みたいな、なまりの強い高田社長の独特の声が聞こえてきそうだ。

やつとのことで彼女の言葉の隙間を見つけた俺は、人が生まれて来ることには意味があること、生まれた個人には生き生きとした人生を過ごす権利やチャンスがあること、人はいつからだつて変わらうと思えば変われるのだと言うことなんかを話してみた。

「貴方の人生は貴方の物です！決してご両親の物でもなければ、お姉様の物でもありません。貴方らしく……生き生きとですねえ……」

俯いたまま俺の話を聞いていた彼女が顔を上げる。「わたしが両手を広げても……」

「……？」

「何を言っているんだ？」最初彼女が何を言い出したのか？俺には理解できなかつた。

「お空はちつとも飛べないが飛べる小鳥はわたしのように地べたを早くは走れない」

「なんだ、彼女も俺と同じ詩が好きなのか？この希望に満ち満ちた詩を好きだと言うことは、彼女も

前向きに生きていくのはずじゃないか！」、俺はほつとしていた。

「わたしが体をゆすつても

きれいな音は出ないけど

あの鳴る鈴はわたしのように

たくさん歌は知らないよ」

言いながら彼女はのろのろと立ち上がった。

「鈴と小鳥と それからわたし

みんな違って みんないい」

俺を見下ろす彼女の目が鈍く不気味に光る。

「みんな違って みんないい……、そうですよねえ？小谷さん……。人それぞれでしょ？生き方なんて……。人それぞれで良いんですね？」

彼女の瞳は何かに取り付かれたように空ひだ。俺は心中で彼女と一緒に詩を暗誦していた自分を、そののんきさを後悔した。

「貴方はどうしてそうなの？自分の生き方を……、前向きに生きることを……、押し付けるの？！」

彼女の声のトーンは高まり、もはや金切り声になっている。

「お姉ちゃんと一緒に暮らしてた時もそうだったでしょ？」

「お姉ちゃん？」、「俺と暮らしてた？」、そう言われて「まさかな？」と思う。真喜子に妹が居る

とは聞かされていたけれど、駆け落ちみたいに結婚したから、妹はおろか、真喜子の家族とは一面識もなかつた。

つつと背中に嫌な汗が伝う。

「まつ、前向きとか、ポジティブとかが……、ぜつたいに良いなんて誰が決めたの？結局貴方はお姉ちゃんを捨てたでしょ？」

机の上のアンケートに目を走らす。そこには確かにあった。盛岡亮子、と。

「野良猫を拾つてきて、一度は飼つてみたけど……、結局捨てた。

それと同じことよー無責任だわ、貴方は！つま、それも別に良いんですけどねえ。人それぞれ……、みんな違つて みんない…… そつ

でしょ？ふふつ、ふふふふふふ！」

不気味に高らかに笑いながら、亮子がにじり寄る。声を出そうとしても喉がからからで声にならない。

心臓がばくばくと早鐘を打つ。

「動けない！動けない！」、俺の頭の中は真空のよつで、全ての思考が凍り付いている。

早鐘を打つ俺の心臓に、亮子の手の中で鈍く光る熱い鉄がぶち込まれた。

俺の胸に骨ばつた重みがのしかかる。

俺の腹に馬乗りになつて、胸を、喉を亮子が貫く。その口からは、狂つたうわ言のように「わたしと

小鳥とすずと」が繰り返されている。

何かを得ると言つことは、何かを失うと言つことと表裏一体だと言える。真喜子との生活を失つた

その代わりに、俺は「わたしと小鳥とすずと」と出合えた。一編の素敵な詩は、俺に生きる力を与え

俺に幸せをもたらした。

本当に本当に愛しい幸せを手に入れた代わりに傲慢や無謀と手を切ることができた。

傲慢や無謀を手放したと同時に、俺は若い頃の勢いや俊敏さをすっかり失つてしまっていた。真喜子と出会つた瞬間に「ぴぴぴぴー・ぴぴぴぴー」と鋭く発せられて

いた心の警告音は、幸せを手にした今、「ぴぴぴぴ、ぴぴぴぴ」と囁つまうやかな小さな音に変化してしまっていた。

細く開いたブラインドの羽の隙間から、冬の夕日が差し込んで、生臭い俺の血と混ざり合つ。

もう痛みも感じない。

俺は薄れ行く意識の中で、ハワイを思い浮かべた。妻との幸せだったハワイを、誠太と行くはずだったハワイを……。

(後書き)

お読みいただき、ありがとうございました。  
駄文ではありますが、よろしければご感想をお聞かせいただければ、  
励みになります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4681b/>

---

みんなちがって、みんないい？

2010年10月9日14時25分発行